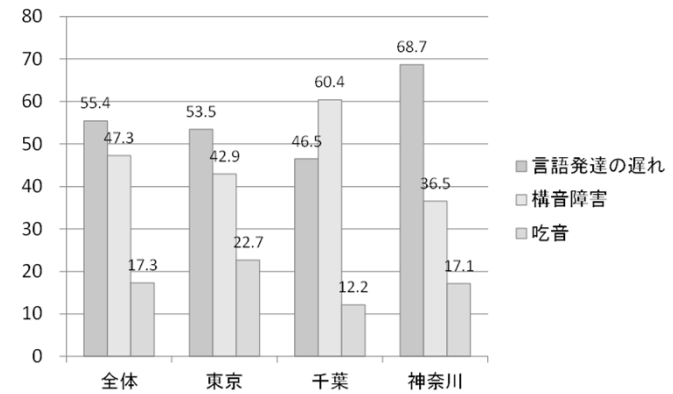


言語発達遅滞の支援の実際

東京学芸大学
特別支援教育・教育臨床サポートセンター
大伴 潔

ことばの教室を利用する児童の実態（2016年）
（重複含む）



1

2

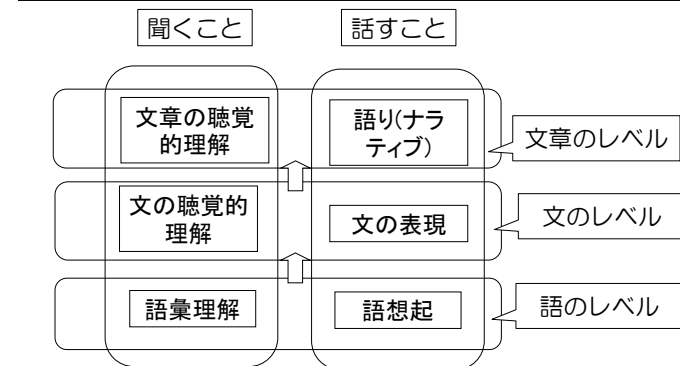
LCSA

LC Scale for School Age children
学齢版 言語・コミュニケーション
発達スケール



大伴・林・橋本・池田・菅野（2012）学苑社

ことばのさまざまなレベル



3

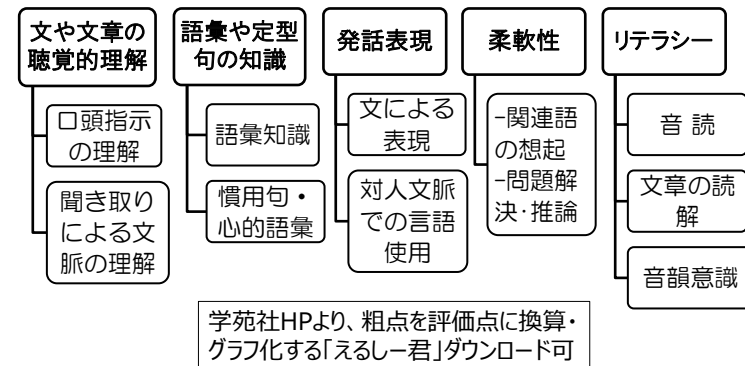
4

学校生活で必要とされることばにかかわるスキル

- 教師の教示や説明を聞いて理解する
- 語彙や定型句等を豊富に知っている
- 文法的な表現ができ、対人場面でことばでやり取りができる
- 柔軟に発想できる
- 音読ができ、文章の読解ができる

5

LCSAの構成



6

- 学齢期の語彙数は、3,000から10,000語あると言われている。
- 語彙を増やす5つの方略
 1. 子どもの言い誤りや言いよどみを捉えて適切な表現をフィードバックする
 - 共感的・肯定的に受け止めたうえで、より適切な表現に導く
- 段階的リキャスト(re+cast)
 - C「椅子のところあった。」 → T「椅子のどこかな、右？左？」
 - C「右かな」 → T「椅子の右にあったんだね。」

7

子どもが言い淀んだ場面を捉えて

- C「ガシャンってなった。」 → T「こういうこと？(身ぶり) なんて言ったらいいかな。」
 - C「ぶつかった？」 → T「ぶつかったのか。」
 - C「お友だちに借りたんだ」 → T「貸してあげたんだ」
 - C「こうやって、ぐいってやった」 → T「ひねったんだね」
- <リキャスト>

8

- 語彙を増やす5つの方略

2. ことばの意味を考え、別のことばで置き換えることに慣れる

フィードバックするだけでなく…

別のことばにおきかえてみよう

- 会話がひと段落したら、似た意味のことば(類義語)や反対の意味のことば(対義語)を提示
 - 「借りる」の反対語は？ 借りると貸すとの違いは？
 - 「ひねる」に似た手の動きは？(折る、まげる)
- 動作とともに語を使い分けたり、例文を作ったりする

そのことばをどんどん使ってみよう

9

学齢期の言語指導の特徴： メタ言語的アプローチ

- メタ言語的活動＝ことばについて、ことばで客観的に考える活動
 - ことばの意味を別のことばを使って表現する
 - 似た意味の語を想起する
 - 反対の意味の語を想起する

ことばの意味的ネットワークを広げるとともに、つながりを強める

10

- 語彙を増やす5つの方略

3. 指導する語彙を選択して直接アプローチする

- 教科書などの文章に登場する、子供の理解が不十分と思われる語を指導する → 正しく語を理解しているかの確認が重要

レベル4 会話や作文で自らが使っている言葉

レベル3 意味の説明もできるが

自分からは想起することがない言葉

レベル2 聞いたことはあるが意味を説明できない言葉

レベル1 耳なじみもない言葉

語想起指導
の対象

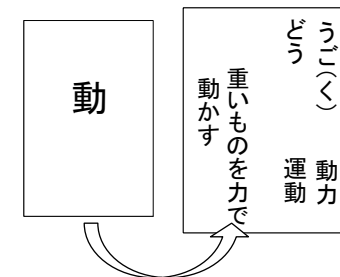
語彙指導
の対象

知らないことばを探してみよう

わからなくても
いいんだよ

- 教科書に載っている語は、漢字で表記されるものが多い
 - 漢字の習得と併せて行う
 - 訓読み
 - 複数の音読み → 熟語での例と意味
- カードで「マイ辞書」を作る

「情報カード」に書き出す




11

12

漢字の書字 <多感覚的な指導> 視覚 聴覚 運動 意味

- 視覚ルート
 - 書き誤りのある部分を色づけ; 順序性の強調
- 言語ルート
 - 「赤は上が『土』」
- 運動ルート
 - 漢字を構成するパーツ(部分)のスムーズな運筆運動記憶の形成
 - 粗大運動としての空書から徐々に紙の上に
- 意味ルート
 - 意味の手がかりや関連性の重視

赤 虫 


腕の粗大運動
↓
指先の大きな運動
↓
筆先の運動

池 泳 清

13

3. 指導する語彙を選択して直接アプローチする

- 意味的に近い語を関連づけて指導する
 - 意味的な文脈 → 語彙知識を整理しやすい
- 時間や季節にかかわることは、位置を表すことは、工作や調理にかかわることばなど
 - 1) 場所を表す語
 - 2) 時間を表す語
 - あさって・おとといは何日?
 - 来週・先週の木曜日は何日?



14

3) 動きを表す語

語の種類	例
工作で行うこと	
口でできること	
手でできること	

15

- 仲間あつめ
 1. 上位概念や下位概念にもとづく分類
 2. なぜ一緒にまとめたのかを説明
 3. 同じカテゴリーに属するほかの仲間とはどこが異なるのかを述べる
 - それぞれの似ているところや違いを説明し合う
 - 「文表現」にもつながる

16

- 語彙を増やす5つの方略

4. ことばを学ぶ方法を学ぶ

- ことばに対するバリアーを取り除く
- 質問する、線を引く、辞書を使う

ことばの意味を調べてみよう

付箋紙やカードで
コレクション

「仲間ことば」を考えてみよう

17

- 意味の理解に自信のないことばに線を引く習慣をつける
- 意味がよく分からないことばについて質問する習慣をつける

大人の役割も大事

- ことばの意味を辞書で調べる習慣をつける
- 辞書の使い方のコツについて学ぶことから始める

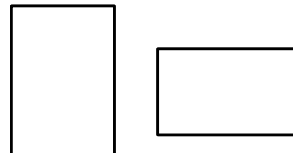
18

- 語彙を増やす5つの方略

5. 学ぼうとすることばを視覚化する

- ことばを文字化する
- 新たな語彙をカードにしてコレクションの対象にする
 - 表と裏の活用
 - 繰り返しの学習

ワーキングメモリーに課題のある
児童には聴覚提示のみでは困難



19

語彙

文表現

1. 説明する力を高める

(知識をことばで整理し、推論する)

● どんなものクイズ

- 特定の物の形、色、素材、用途、上位概念などについて、指導者と説明し合う
- 目で見ただけの形や色などに関する表現だけにならないことが重要

● お役立ちクイズ、お役立ちカルタ (物の機能について説明する)

- 『『○○』がなかったら私たちはどのように困りますか?』
- 例えば、「傘」ならば、「雨が降るときにさすと、ぬれなくてすむ」

20

- まちがい探し

- 2枚の絵を見比べて、相違点をことばで説明する

- 自分の考えや判断の根拠を言葉で表現する

- 「○○と○○はどこが似ていて、どのように違いますか？」
- 考えてみましょう：
「はさみ」と「ナイフ」の似ているところと異なるところ

児童用の辞書を活用したクイズ

- 「ことばえじてん」(例:学研)の利用
 - 「ちりょう」=「びょうきやけがをなおすこと」
(ひざのけがを手当てしてもらっている絵)
 - 「ふえる」=「かずやりようが多くなる」
(おもちゃが床にひろがっている絵)
- 定義から語想起へ:Tが定義を言う「病気やけがを治すこと」→「ひとことと言うと？」
- ことばから定義へ:T「『ふえる』の意味は？」
- 絵辞典のイラストを利用 覚えるのではなく、大人と一緒に考えてみる姿勢が大事

21

22

説明する力を高める

- 手続きのような論理性のある説明をする

- 目的に至るための手順

- 「○○を作るにはどうやったらいい？」
- 「はじめに」「次に」「最後に」などのことばも

- 目的地に至るための道順

- 「○○から○○まで行くにはどうやって行く？」
- 「右・左」「～の前を」など位置を表わすことばを正しく使う

2. 自分の経験について語る (personal narrative)

- あまり自分から話さない子どもの場合 (バージョン1)

1. 教室に来る前に、話す内容を決めておいてもらう(保護者の協力)
2. この1週間であったことのひとつを話してもらう
3. Tは、どうまとめるかを考えながら児童に質問し、話を引き出していく(メモをとる)
4. Tは、キーワード(または文)を書いて列挙し、まとめあげる
⇒完成形の例示+達成感



23

24

拡張模倣

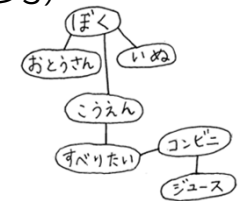
- 相手に受け止められたという安心感
- 直後にフィードバック➡自分の発話と対比しやすい
- 複雑な高次のモデルが提示される

25

- 自分から話してくれる子どもの場合（バージョン2）
 - ヒントカードを見て5W1Hを入れて語ってもらう
 - 必要に応じて「そこで」「ところが」「すると」「なぜなら」などの接続詞のヒントカードも

いつ
どこで
だれが
なにを
どのように
どうした

- 多弁で話が飛んでしまう子どもの場合（バージョン3）
 - 子どもの語りの内容をTはキーワードで記録
 - 話の展開を子どもとともに振り返る
 - 線でつながるようになることを意識してもらい、次回に臨む



26

3. ストーリーを語る

- 状況画や写真をことばに置き換えてみる
 - キーワードを一語ずつカードで列挙
 - 提示されたキーワードをすべて含むお話を作ってもらう(キーワードの配列は自由に)
 - Tは指導者というよりも、一緒に考えるパートナー
- 連続性のある絵(マンガ)や写真で示された出来事を時系列に並べ、ことばで表現する (fictional narrative)
 - 5W1Hの入った文章を構成する
 - 「そこで、ところが、すると、さらに、なぜなら」などの接続詞をカードで提示。自由に選択。

完成した文章の振り返り

27

- 絵図版などの視覚的手がかりにもとづいて語る

- 絵図版などを用いた活動のバリエーション

- A) 配列を課題の一部にする
- B) せりふバージョンと物語バージョンとを使い分ける
- C) 登場人物Aの視点からの物語と、Bの視点からの物語
- D) 絵を見ていない人にも伝わるように語る

「対人文脈」の側面も

28

発想の柔軟性

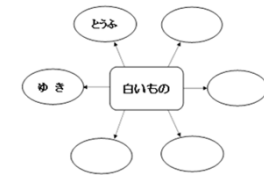
- 語による表現は
＜語彙知識＞と＜語想起＞によって支えられている
1. 語彙知識
 - 頭の中に知識としての語彙をどの程度持っているか
 - 語彙知識は経験や学習の産物
 2. 語想起
 - 知識となった語彙をいかに的確にすばやく引き出すことができるか ⇒ 柔軟性

29

語彙

柔軟性

プロフィールの読み取りから支援へ
1. 語想起の柔軟性を高める

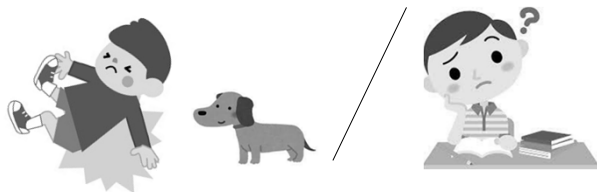


- 「ことばさがしゲーム」
 - 与えられたキーワードに合うことばを挙げたらポイントゲット
→ シール or 前進
 - 「回るもの といえば？」
 - 「浮かぶもの といえば？」
 - 口頭だけでなく、書き留めておく
 - どういうところがキーワードと合っているかも説明

30

状況理解や柔軟性： 因果関係や心的語彙を含むお話づくり

- 「なんでこうなった？」
- 「このあとどうなる？」
- 5W1H、登場人物の内面を洞察
- 答えた後に文章にする

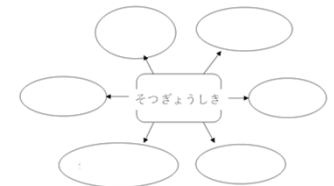


31

語想起から文章表現へ

柔軟性の低さが、文章表現の弱さにつながることも

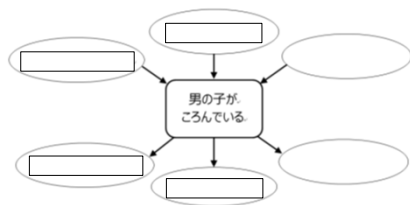
- ① 発想力を高める
キーワードや絵図版から関連することを列挙
 - ひらめきマップで図式化したうえで説明する
- ② 構成力
カードに書いて、ことばを一行につないでいく
 - マインドマップの枝葉から一連・ひとまとまりを選択
- ③ それに基づいた作文などの文章表現



32

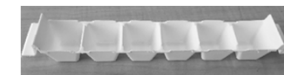
2. 状況理解力を高める

- 出来事の原因や次に起こり得る状況を考える
- 因果関係ひらめきマップを活用する



33

- 促音、撥音、長音などの表記の基礎となる音韻意識を高める
 - 特殊拍の有無(入っているかどうか)を判断する
 - 特殊拍の位置(どこにあるか)を判断する
 - 拍の単位へ分解する
 - 耳(聴覚)だけでなく、目(視覚)や身体(運動)を活用する
- ワーキングメモリーを活用するその他の音韻意識課題を行う
 - 「暗号ゲーム」: 逆唱(さかさ言葉)
 - 逆唱は、逆から言うと有意味語になる刺激から始める
(「えくつ」→「つくえ」)
 - 文字カードによる言葉の構成



34

「聞き取り文脈の理解」の支援例

- ① 短いストーリーを用意する(長さを調整; 写真・絵・図などを提示しても良い)
- ② 正確に理解していないと思われる語を取り出して導入(メタ言語)
- ③ 「いつ」「どこで」などのキーワードを使って、文章を思い出してもらおう
 - 間違えても深入りしない
- ④ 再度聞かせて、今度は正解になったことをほめる
(あらかじめ尋ねる内容を提示してから、語り聞かせても良い)
- ⑤ キーワードを書きだして、Cに並べて語ってもらう
 - 多少不備があっても、達成感をもって終わる

いつ どこで だれで
なにを どうした

35

通級における配慮点

- 足場を組む
 - Tが正誤を判断するのではなく、子どもに自己修正の機会を与える
 - ヒントやキーワードを用意し、子どもが自力でできるように
- 言語経験の繰り返し(自然な文脈で)と、当日学んだことの振り返りの実施
- 課題: いつ退級とするか? (到達点が明確な構音障害のように行かない)
 - 子どもが、自分でやってみる、と思えるか
 - 担任との連携が図れるか

36